

令和元年度群馬県総合教育会議 議事録

1 日時

令和2年3月17日（火）13:30～15:00

2 出席者

<会議構成員>

山本知事、笠原教育長、平田教育長職務代理者、青木委員、武居委員、益田委員、竹内委員

<事務局>

〔教育委員会事務局〕

飯塚教育次長、山口教育次長、山崎総務課長、他14名

〔知事部局〕

星野総務部長、加藤総務課長、古仙企画課未来創生室長、他5名

3 議題

(1) 新たな教育大綱について

【 概 要 】

1 開会

(司会)

それでは、ただいまから令和元年度総合教育会議を開会いたします。私は本日の司会進行を務めさせていただきます総務部総務課の加藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは開会にあたりまして、主宰者であります山本知事からごあいさつ願います。

2 あいさつ

(山本知事)

群馬県知事の山本です。

教育委員の皆様におかれましては、年度末の大変お忙しいところ、ご出席いただきまして、心から感謝を申し上げます。

開会の挨拶に先立ち、まず、新型コロナウイルス感染症対策について、皆さんに一言お礼を申し上げたいと思います。

この感染症の拡大を防ぐということで、国の要請を受けて、群馬県でも3月2日から、県立高校及び県立特別支援学校を臨時休業としました。

教育委員会におきましては、休業中の生徒に対するケア等について、ご配慮いただいている、知事として、改めて感謝を申し上げたいと思っています。

今後、教育委員会をはじめ様々な機関と連携をいたしまして、これは私たちが経験したことのない危機だと思っていますが、県民の皆さんの力を合わせて乗り越えていきたいと思っておりますので、引き続きご協力をお願い申し上げたいと思っております。

さて、まず新たな総合計画について、皆さんに議論を展開していただく前に、触れさせていただきたいと思っています。

以前、東京のある小学校で教えておられる教育者の方が私におっしゃいました。子どもたちに、「何で勉強するのか」と聞かれると、「それは、自由になるためだ」と、いつも答えています。これは名言だと思いました。つまり、英語ができる、あるいは、色々な勉強をする、そういうことによって人生の選択肢が増えるという意味なんだと思っておりますけども、このような言葉を子どもの時に聞いていれば、こんな人間ではなかったのではないかと思っています。

今、県では、新しい総合計画の作成に取り組んでいます。総合計画は2種類あって、一つは、10年間の総合計画ということで、具体的な色々な政策等々を書かせていただくつもりです。これはどの県にもあります。5年間の計画の県も、10年の計画の県もありますが、どの都道府県もやっている、いわゆる10年間の総合計画ということです。具体的な目標に対する具体的なプランを書いているものです。

もう一つですが、20年後の未来を見据えた群馬県のビジョンというものです。12人のベストアンドブライテストの方に、県内外から集まっていただき、総合計画策定懇談会で議論をしていただいています。

こちらのビジョンは、今、県議会の特別委員会で、色々と議論させていただいています。県議の方々から、色々な意見が出ているようですけれども、今日の新聞を見たら、批判続出とか書いてありました。ピントが外れているなど思うのは、もともとこの総合計画ビジョンの方は、いろんな議論が百出するので、十二分にわかった上で出させていただきました。これは哲学で理念なので、わかりにくいところもあります。そこは、11月に向けて、県議会でも、色々な批判もしてもらおう、色々な意見も出してもらおうと、そういう中でぶつけ合って、良いものに作り上げていきたいと思っています。

知事として思うことは、どんなことでもそうなんですけれども、基本となる理念がないといけません。コンセプトがないといけません。

哲学というものが無いところに、政策の深みはありません。

20年後に何が起こるかは、誰にもわからない。20年後の世界は誰にもわかりませんけれども、よく地球温暖化対策問題で使われてるバックビジョンというものなんですけれども、2050年のことを想像して、そこから今振り返って、今何をやるべきかということを考えるという手法でやっています。

これは、私たちの間で、20年後の群馬県がどうありたいか、群馬県の教育がどうなったらいいのかを考えるということです。

例えば、自立と言っても、色々な意味があると思いますし、自立分散型の社会と言っても、色々なとり方もあると思います。私たちが、20年後の群馬県がどういう姿で、それぞれどういう存在でありたいのか、これをしっかりとまず考えていくことが重要です。ということは、教育のビジョンも、今、総合計画の中で議論しているビジョンに沿った形のものになっていくのだらうと思っています。今後、皆さんに中身を色々と考えつつ、色々議論を進めていただければと思っています。

まだ細かいことは申し上げませんが、キーワードは「自立」だと思っています。県民の自立、産業の自立、地域の自立、群馬の自立。地域分散型の社会というのは、例えば災害対策一つとっても、再生可能エネルギーの推進をしっかりと進めることによって、地域分散型エネルギー構造ができれば、災害時の停電も防ぐことができるようになります。

こういったことを、しっかりコンセプトとしてまとめていきたいと思っています。私たちが目指す姿は、どんな人たちも、もちろん外国人の方々も、それぞれの強みを発揮できる社会でありたい。みんながものすごく生きやすい、いろんな価値観を受け入れる中で、それぞれの人たちがそれぞれの強みを活かせる社会です。そういう社会を群馬県に作っていきたいと考えています。

特に教育は、その中でも私たちは最重要なものの一つと位置付けていまして、それぞれが思い描いた、そんなに簡単ではありませんが、人生を選べるそういう選択肢のある群馬県にしていきたいと思っています。

もう一回申し上げますが、すべての起点は教育だと考えています。教育が変わってこそ、群馬が変わると思っています。総合計画策定懇談会は、政府が諮問委員会を作っても選ぶような人たちを引っ張ってきたんですけども、ここでもみんなが言ってるのは、「教育が一番大事」だと。この教育イノベーションみたいなものをしっかりとコンセプトの一つとして、しっかりと打ち出していこうということです。

もう一つ、SDGsの関係があります。皆さんご存知のとおり、SDGsは、今や世界の潮流になっています。私は、80年代90年代に、国連開発計画という世界最大の技術協力機関のニューヨーク本部に勤めていました。もともとJICAの職員だったのですが、そこから何年か出向して、そこで環境問題等々や

っていました。その頃は、いわゆるサステナブルディベロップメントっていうの流行だったんですけども、持続可能な開発、これはそんなに広がってなかった。それが今ではSDGsを理解しない企業は、消費者の理解も得られないという状況になっています。県としても、SDGsのイニシアティブを作って、人口減少とか、超高齢化などの社会課題の解決、持続可能な地域づくりをやっていききたいと思います。

これについては、群馬県は出遅れていましたので、私の方から各部局に号令をかけて、これからしっかりといろんなことにも手を挙げると、ということをやらせていただきたいと思っています。SDGsの観点を活かすということも、教育大綱の策定の中で、ぜひ皆さんに考えていただきたいと思っています。

それから、今後の20年後の総合計画では、この20年後のビジョンを考えると話をしたんですけども、やはりいろんな課題があります。このままいくと、少子高齢化はさらに進んでいくだろうと思います。地球温暖化もこれだけ進んで、先般、都道府県知事として初めて、気象災害非常事態宣言というものを出しました。台風19号クラスの災害が毎年、群馬県を襲うというようなことを想定して、とにかく、まずこの5年間は、災害対策に力を注ごうみたいなことを話しています。

グローバルな環境はどんどん変わっていきます。ICTやAIとか、様々な変化が、さらに広がっていきます。今の新型コロナウイルスで、まさしく世界経済が繋がってるっていうことを私たちは目の当たりにしたわけですが、こういう予想もしなかったことが起こってくる。こういう中で、どうやって、群馬県から教育イノベーションを発生させていくのか、あるいは、群馬県が他県や世界を引っ張っていくような教育のモデルを作るのか。このぐらいの気持ちで、今度の大綱を作っていきたいと、知事としては感じています。

この総合教育会議は、4、5年前にできたと聞いています。いじめ問題等々もあって、きちっと教育委員会と、地域の首長が連絡を取りながら進めていくと。こういういろんな世の中の流れの中で、こういう仕組みができたと思います。もう一度言いますが、教育こそ、まさしく改革の1丁目1番地であって、変えるべき部分と、しっかり守っていかなくてはいけないものもあると思います。今申し上げたように、これから、群馬県がビジョンを作っていく。さらに、この後はもう少し具体的な、10年間の総合計画を作っていく。このいろんな議論の中身もにらみながら、ぜひ、今までとは違う視点で、10年20年後の群馬県を見据えた教育大綱を作っていきたいと思っています。今日も、忌憚のないお話をいただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

(司会)

続きまして、教育委員会を代表して笠原教育長からご挨拶をお願いします。

(笠原教育長)

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶をさせていただきたいと思いません。

知事におかれましては、現在、新型コロナウイルス感染対策の陣頭指揮で大変お忙しい中、本日、総合教育会議ということで、知事と教育委員の皆様方との意見交換の場を設けていただいたことに、改めて感謝を申し上げます。

この新型コロナウイルス対策ですが、先ほど知事からお話があったように、県内の小中高等学校と特別支援学校が臨時休業となっています。大変異例な事態ですが、教育委員会としても、子どもたちの安全、そしてまた、様々な適切な支援を行うべく、県内の市町村の教育委員会や関係部局と連携して、取り組みをさせていただき、この危機を何とか子どもたちのために、子どもたちと一緒に乗り越えたいと考えています。

そして、この総合教育会議ですが、知事が就任されて、すべての教育委員さんと意見交換をさせていただく初めての場です。大変貴重な場と考えています。

この総合教育会議では、これまでも、特別支援教育や子どもたちの学力向上など、具体的なテーマを議論させていただき、特別支援学校の高等部の整備等、具体的な施策につなげていただけてきています。

本日は、この総合教育会議は、新しい県の総合計画、これと連動させて、新たな教育大綱を策定するという、スタート台ともいべき大変貴重な機会だと思っております。

教育大綱ですが、教育委員会では第三期教育振興基本計画と並びまして、教育分野の最上位計画と位置付けています。

今後の教育施策の方向性を定める大変大事なものと考えていて、知事と思いを一にいたしまして、この策定、そしてこの取り組みを進めて参りたいと思っております。

今日は、それぞれの委員さんも関心の高い項目について、知事としっかり意見交換をさせていただきたいということで、非常に準備をしていただけて、この場に出席をしていただけています。

ぜひ、群馬の未来を支える人づくりに資する、有意義な会議とさせていただきますことをお願い申し上げまして、私からのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(司会)

初めての会議ですので、ここで、教育委員の皆様から自己紹介をお願い申し

上げます。

(平田教育長職務代理者)

教育委員の平田です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、私学の共愛学園前橋国際大学に29年間務めています。2008年から8年間、学長を務めました。その経験から言うと、大学を作っていくということは、地域を作っていくという、そういう責任を感じて、作っていくことだと思っています。だからこそ地域の力を借りて、一緒に作っていくものだという事をすごく感じました。

現在は、共愛学園法人本部の副学園長として、共愛学園の小中高の一貫連続した教育を、先生方と一緒に作っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(青木委員)

青木と申します。保護者の目線で、教育委員として従事させていただいています。

教育委員に就任する前は、群馬県PTA連合会で5年間、家庭教育委員として活動していました。我が子、また子どもたちに、親として、生きていく上で必要なライフスキルを身につける援助とはどういうことなのか、どうしたらいいのだろうかと勉強しながら、県内のPTAにそれぞれ発信していく活動をしていました。地元大泉町では、母子保健推進員として、乳児や乳幼児のいるご家庭に訪問し、悩みや相談を聞いてあげたり、また検診の手伝いをしたりしながら、それを行政に届けるパイプ役の活動をしていました。

その傍ら、平成27年に、これまでの活動を生かしながらNPOを立ち上げ、副理事長に就任し、不登校やいじめ問題、虐待、DV、女性保護、また、現在は、こども食堂などに力を入れて取り組んでいます。昨年理事長に就任しまして、11月に15歳から20歳までの子を支える事業になりますが、自立援助ホーム設立の認定を群馬県からいただきまして、本部長として、この4月に開所に向けた準備をしているところです。

本日は、保護者の立場でお話させていただければと思っていますので、よろしく申し上げます。

(武居委員)

教育委員の武居朋子と申します。

現職の時は、義務教育において長年教員として、学校教育に携わって参りました。管理職になってからは、特に特別支援教育を柱にした学校経営をやってきましたつもりでいます。

現在は、地元地域において、民生委員児童委員をさせていただいていますので、よろしく願いいたします。

(益田委員)

平成30年10月1日に教育委員に着任をさせていただきました、益田裕充と申します。どうぞよろしく願いいたします。

私は、群馬大学教育学部で学生の指導をしまして、教員の輩出に日々努力しております。学内では、副学部長としては学部経営を担い、昨年度まで、教育学部附属中学校長を拝命していました。文部科学省においては、新しい学習指導要領の改訂等にも、携わらせていただいています。

大学教員の教壇に立つ前は、中学校の教壇にも立っておりました。これらの経験を踏まえ、学校教育について、私なりに考えていることや、思っていることもあります。

そういう視点から、教育委員会では、発言させていただくことがあります。どうぞよろしく願いいたします。

(竹内委員)

高崎の竹内健と申します。どうぞよろしく願いいたします。

昨年の10月に拝命いたしまして、まだ半年も経ってない新参者です。特に教育については特別な知見があるわけでありませんので、ただ自分のやっている仕事がソフトウェアの開発ですので、ICT教育の中で、少しお役に立てるかなと思っています。

また、自分のような民間人から見た目線というのも、教育には必要なのかなと思ひまして、時にはずれたことを申し上げるかもしれませんけれども、皆さんのご指導いただきながら、がんばっていきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。

それでは議事に入らせていただきます。次の進行は山本知事にお願いいたします。

3 議題

(1) 新たな教育大綱について

(山本知事)

それでは、議長職を務めさせていただきたいと思います。皆様には、議事の円滑な進行、率直な意見交換をお願いを申し上げたいと思います。

次第の1「新たな教育大綱について」ですが、教育大綱を策定する上で、その方向性を示すことになる総合計画が、現在どのような検討段階にあるのか、企画課未来創生室長から説明をお願いします。

(企画課未来創生室長)

総合計画を担当しています、企画課未来創生室長の古仙と申します。それでは資料1について、ご説明させていただきます。先ほど、知事からお話がありました20年先を見通したビジョンの検討状況についてのご説明です。

まずシート1をご覧ください。目指す姿とありますが、これは20年後の目指す姿です。20年後の目指す姿をお示しし、そして、バックキャストिंगの思考で考えています。変化の見通しを踏まえ、政策の方向性を導き出していく。このような考え方で検討しているところです。

シート2をご覧ください。2040年までに4つの自立を果たし、東京圏依存体質から脱却するという考え方です。東京圏依存体質からの脱却ですが、当然、東京との経済的な交流を切るという意味ではありません。この次のシートでもご説明させていただきますが、この精神的な自立ということと、群馬県にいる私たちの自信とプライドを取り戻すというようなところの意味を込めているところです。このシート2で、一番下の方から見ていただければと思いますが、3つの基本姿勢というものを、このビジョンでは掲げています。三つの基本姿勢ですが、まず、内外の才能・異能、いわゆる出る杭を受け入れ、伸ばす。それから、進取の気風に溢れ、フロントランナーの気概を持つ。そして、群馬の風土に根差した魅力を新たなスタイルとして発信する。これが3つの基本姿勢です。それぞれに対応するような形で、自立の概念を考えています。まず、内外の才能・異能、いわゆる出る杭を受け入れる、伸ばす、に對しましては、県民の自立ということで、一人一人が新たな時代に自らの道を切り開く力を持つということをご提案しているところです。また進取の気風に対応するところに関しましては、産業の自立です。変化を取り入れ、時代に即した価値を持続的に作り出していく。そして、群馬の風土に根差した魅力を発信するということに對しましては、地域の自立です。それぞれの市町村が、独自の魅力を活かした地域を形作っていく。そして、この県民の自立がまずあって、そして、それが産業の自立、地域の自立とつながり、県民の自立、産業の自立、地域の自立のすべてが達成された場合に、群馬の自立が成り立つということです。ここでは東京圏依存体質から脱却し、群馬から世界と直接つながるという概念を

示しているところです。そして最上位、これが最終的な目標です。住む人、縁ある人とこれから住む人、皆が誇りを持ち、ここにいることを幸福だと感じられる県へということをご提案しているところです。

次にシート3をご覧ください。3つの基本姿勢に関するご説明です。歴史的に考えてみまして、古代において群馬県は、東国文化、上野三碑等を考えましても、私たちはフロンティアというか、フロントランナーであったと考えているところです。近世近代におきましても、富岡製糸場、それから、中島飛行機等を考えましても、やはりフロントランナーの位置を群馬は占めていたと考えています。しかし、現在は、東京近隣県の一つとして、一極集中の恩恵を確かに受けていますが、引き換えとして、画一化と「らしさ」を喪失してしまっているのではないかと考えています。群馬県のことを、なぜか自信を持ってない、群馬県のことを、なぜか好きになれないという中で、そういった方が増えている中で、群馬県に対する自信とプライドをもう一度、取り戻そうということです。上毛カルタで考えましても、過去におきまして、皆さん知っている偉人の方、群馬から輩出してきました。現在でも実は多くの人材を輩出していますが、多くが東京に流れてしまっています。このようなことから考えまして、自立への第一歩ということで、3つの基本姿勢をご提案しているところです。

それから、シート4をご覧ください。「自立なくして持続なし」ということで、ここでSDGsの考え方を取り入れてるところです。そしてここでは、幸福の概念としまして、一人一人の幸福、社会全体の幸福、これは県民の共生です。それから将来世代の幸福、持続可能性ということで、この3つの幸福の概念を考えています。この3つの幸福の概念をそれぞれ、20世紀型の捉え方、それから、これからの捉え方ということで再定義をかけています。一人一人の幸福のところで、これまでの捉え方ですが、型が定まった幸福、画一的な仕事と暮らし、標準的な家族の形というものがこれまでの捉え方でした。これからは多様な幸福、一人一人異なる仕事と暮らし、良好な人間関係というように再定義しています。先ほど、懇談会の話が知事の方からありました。懇談会の中でも、幸福というものは、一人一人が思い切ることができることをとことんやるということが、一人一人の幸福につながるのではないかと、というご意見も出ていたところです。そして社会全体の幸福、県民の共生のところ、これまでの捉え方ですと、固定的な県民ということで、これまでの県民は居住者、出身者と私たちは考えている傾向がありました。これからは、当然居住者、出身者に加えまして、関係人口等も含めまして、関係者、それから外国人活躍推進の観点から外国人も、県民として考えていくという考え方は、そしてもう一つは、将来世代の幸福です。ここで持続可能性ということを入れてあります。これまでの考え方、今私たちがいる時代の私たちが幸せであればいいというような、今

の経済成長を最大化するような考え方が主流でしたが、これからは、未来を含めた私たちの子どもや孫も含めた、幸せを考えていくというところで再定義をかけています。

シート5をご覧ください。これからの20年、群馬県を取り巻く状況は非常に厳しいものがあります。SDGsの理念を取り入れ、ピンチをチャンスに変えていく発想が必要ということでご提案しているところです。具体的には、経済、社会、環境、国際の四つに分けて分析を行っています。それではそれぞれの分析につきまして、ご説明させていただきます。

シート6をご覧ください。まず、経済に関する分析です。デジタル化が進み、価値の源泉がシフトしていくと、県が強みとしてきたものづくりのあり方が根本から変わると考えています。ICT技術の進化は、非常に速いものがあります。AI、量子コンピューター、ロボット、自動運転、あらゆる技術がどんどん日進月歩で出てきています。これらをうまく活用するかしないかによって、二つの道に分かれていくと考えています。まず当然のことながら、それがうまく活用できた場合、そのICT技術等を私たちの生活にうまく活用できた場合が、デジタルトランスフォーメーションの方になります。例えば、今、新型コロナウイルスの問題が起きています。この場合でも、デジタルトランスフォーメーションがうまく進んだ場合、例えば、テレワーク、それから遠隔医療等により、医師や看護師等の医療従事者の感染の予防が可能になります。そして、教育におきましても、今、学校がお休みになっていますが、遠隔での授業等が可能になります。次に同じようなことが起きたときに、同じような結果にならないように進めていかななくてはならないと考えています。一方で、こちらは群馬県が進まないようにと考えていますが、うまく乗れなかった場合は、デジタルディスラプションということで、創造的破壊、痛みを伴うような流れにいくと考えているところです。そして2040年の未来像です。これが上手く進んだ方ですと、エッジコンピューティング、今はコンピューターの性能が上がっていますので、中央で集めるのではなくて、それぞれの端末でコンピューティングを行って、それらを合わせるような形で、ICT基盤が分散化していく。この辺りは、自律分散型社会というところのご提案につながっていくと考えています。また、古くからある土地に根付いたもの、群馬の伝統的なものを大切にしていこうということも忘れていません。そういったものとデジタルを合わせるような形で、それが混ぜ合わさるような形の概念であるデジタル発酵ということもご提案しているところです。一方、こちらの方はなるべく進んで欲しくない未来ですが、シンギュラリティというものが想定されています。いわゆる2045年にAIが人間を超えるというふうに言われています。この状況になりますと、人間がAIに使われる未来ということも想定されています。

シート7をご覧ください。こちらは社会に関する分析です。人口が、実に高度成長前の規模に、地域消滅も現実味を帯びてくる。さらに、東京の高齢化が群馬に影響してくるということを想定します。その下にグラフがあります。総人口のところでは、2020年の群馬県の人口は192万6000人です。これが2040年には163万8000人に減少するというふうに見込んでいます。これは戦後から高度成長前の県人口に相当してくるものです。合わせるように生産年齢人口、一番下の年少人口も減っています。代わりに、高齢者人口につきましては、かなり増えていくということが想定されていまして、人口構成も高齢者が増えていくということが想定されています。また、この間に東京都の高齢者は実に80万人増加することが見込まれています。当然のことながら、要介護者が群馬に流入してくる。または、東京の介護需要が膨らむことによって、若者の流出の更なる加速化が懸念される。また、外国人の人口です。2020年は6万2000人でした。これが2040年で9万8000人ということで、県内で約6パーセントの方が外国人になると予想しているところです。

シート8です。ここでは、環境の分析です。気候変動に伴い、災害が増加、一方で県民を守るためのインフラの老朽化が進むということで、これはここにいる皆さん全員が実感していることではないかと思えます。ゲリラ豪雨、それから台風19号のような豪雨が増えている。そして、猛暑日も増えて、酷暑も増加している。群馬県は災害が少ないと言われていますが、群馬県においてもリスクは徐々に高まってきていると想定しています。

シート9です。こちらは国際に関する分析です。こちらに関しまして、下のグラフにありますますが、世界の人口は、ペースを落としながらも、増加が続くと予想されています。このような中、各国の状況を見ましても、ポスト資本主義を迎えた国際社会は、緊張している状態で、これが長期に及ぶという形を想定しています。また、エネルギー、食糧、水、資源など、グローバルに需給が逼迫、ここでもSDGsの考え方を私たちはしっかりと頭に入れていかななくてはならないと考えているところです。

シート10です。このようなピンチをチャンスに変えていくため、県民と連携した新たな行政のあり方を築き、県民の幸福度向上を目指していくということを考えています。この中で新たな行政のあり方は、2つに分かれると考えています。一つは、短期中期の政策の方向性です。こちらは、痛みを伴う改革、対策ですが、それに対して激変緩和、それから痛みを和らげるための対策も、しっかりやっつけていこうということを考えています。一方で、この大きな変化に対応し、問題の抜本解決に向けて大胆な対策を取り組んでいくと、こういった政策も必要と考えています。これを長期の政策の方向性というところで位置付けています。

最後にシート11です。このバランスの割合ですが、当面はハイブリッドで運用していくということで、激変緩和のところの短期中期のところはスタート段階では多く、そして、だんだんと抜本的な部分、大胆な取組である長期のウェイトが増えていくということを想定しています。この短期、中期そして長期の具体的な政策につきましては、今後検討しているところです。

以上です。

(山本知事)

ありがとうございました。

これはもう本当に概念理念なんで、ふわっとしている分かりにくいことありますが、ここも毎回、懇談会のメンバーで、議論をしています。2時間やって、その後だいたいご飯を食べながら、さらに2時間やっています。社会のあり方、20年後の世界などについて、最先端の論文を分析したり、いろんな指標を利用分析したり、あるいは、それぞれ集まってる方々がグローバルな方々で、いろんな人たちの意見を出し合っています。こういう議論を、こんなに長くやってる県はないと思います。何とかこれを、一つのコンセプトとして、まとめ上げていきたいと思っています。

もう1度言いますが、2つありますので。もう一つの総合計画は、どの都道府県でもあるような、おそらく具体的な計画ですけれども、教育もそうですが、どんな社会でありたいか、どんな人間でありたいか、どんなものを目指していくか、という理念がないと、そこに深みがないのではないかと考えています。まだ、この説明自体は分かりにくいこともあったと思いますが、こういうことを踏まえながら、今日はいろんな議論をさせていただければと思っています。

次期総合計画の中にもありますが、4つの自立というものを考えました。県民の自立、産業の自立、地域の自立、群馬の自立です。東京圏依存体質から脱却というのが、大きなテーマになりますが、この自立と連動する基本姿勢としてのコンセプトですが、とにかく内外の才能・異能、出る杭を受け入れること、多様性を受け入れるということ、それを伸ばすということ。それから進取の気性に溢れて、フロントランナーの気概を持つ。これはイノベティブな革新的なものが、どんどん生まれてくる社会にしてこうということです。それからもう一つは、群馬の風土に根ざした魅力ある新たなライフスタイルとして発信するという。これは、知事として掲げた群馬の様々なモデル、経済から教育まで、群馬から先進的なモデルを発信して、これは簡単ではないですが、これからの時代は、地方から東京を変えていくということが大切だと思います。知事は、ルールメーカーではなくて、プレーヤーですが、やり方によっては、ルールメーカーにも影響を与えられます。このぐらいの気持ちを持っていないと、

群馬県知事は務まらないと思っていますので、この後、皆さんのいろいろなお考えを伺っていきたくと思っています。

次に、現行の教育大綱、総合計画の策定を踏まえた重点教育政策、SDGsの教育文化スポーツの取り組みについて、教育委員会総務課長から簡潔に説明してください。

((教) 総務課長)

教育委員会総務課長の山崎です。私からは、資料2、資料3、資料4について説明させていただきます。

資料2については、現状の大綱ですが、こちらの方は、平成27年に関係法令が改正されまして、教育、学術、文化、スポーツの振興に関する総合的な施策の大綱の策定が、首長に義務づけられたことから、策定されたものです。28年、29年、30年、令和元年ということで、この3月末に大綱の計画期間が終了することになりますが、今議会に、提案させていただきまして、新しい総合計画が策定されるまで、延長させていただきたいということをお願いしているところです。こちらの大綱につきましては、教育文化スポーツ各分野の最上位計画に位置づけられています。策定にあたり、留意した点ですが、現大綱の策定当時は、第15次群馬県総合計画の策定と時期が重なっていましたので、総合計画との整合性を図るとともに、教育文化スポーツにそれぞれ基本的な計画があります。それらと一体的に基本的な方向性を示すものとしたものです。資料2の説明を割愛しますが、当時は大綱に盛り込まれていなかったものが、現在では、重点施策になっているものがあります。

資料3をご覧ください。これから策定される新しい総合計画を展望しまして、先取りした取り組みを考えさせていただいています。資料3の上半分がICT教育、そして下半分が外国人児童生徒への教育関係について記載しています。それぞれ現状と今後の取り組みの方向性等ということです。ICTについては、なかなか教育現場に普及していないという状況の中、どのような形で取り組んでいるか、そして、外国人生徒の共生共創社会に向けた教育の充実については、確実に外国人児童生徒数が増加している中、それぞれの個性を發揮しながら活躍していただけるように、いかに教育施策を進めていくかという課題を記載しています。

そして、資料4です。資料4は、SDGsですが、17の項目がアイコンになって、目標として掲げられています。次ページでは、それぞれ現状の教育、文化、スポーツ活動において、それぞれのアイコンがどのように紐付けられるかということ、一目でわかるような形で、関連づけさせていただいています。3ページ以降は、それぞれのアイコンとそしてSDGsのもともとの計画の中

に盛り込まれている、ターゲット、指標、これを仮訳いたしました。これだけですとなかなか、先進国も発展途上国も同時のもので、矢印の下にオレンジで枠が括ってあるのが、群馬県としての課題ということで、取り上げさせていただきます。説明については、割愛させていただきますが、すべてのアイコンについてあるということではありません。4の、「質の高い教育をみんなに」というところが、教育に関連が深いところです。以下、17のパートナーシップで目標を達成しようというところまでまとめさせていただきます。本日は、この一つ一つについて、細かく見ていただくということではなくて、大きな視点でとらえていただきまして、これだけの県の取組が、SDGsに繋がっていて、つまりは、誰一人取り残さない社会の実現に繋がるということをもっと共通認識として持っていただきたいという思いで、この資料を作成した次第です。

(山本知事)

資料の説明、ありがとうございました。

まず、平田先生に伺いたいのですが、大学の学長を経験されてきて、その大学の位置付けというか、役割というのは、相当きちっと議論していかなくてはならないと思っています。例えば、県の計画で言うと、様々な起業をやっていく、イノベーションを起こしていく中では、諸外国を見ても、明らかに大学が中心にある。おそらく、まちづくりも、きっと大学がそこにあるということが、すごく大事だと思っています。そのあたりは、どうやって群馬県として、大学教育の位置付けも含めて、考えていけばいいのかということについて、ご意見をいただきたいと思います。また、何か他にもおっしゃりたいことがあれば、お聞きできればと思います。

(平田教育長職務代理者)

大学教育は教育委員会の管轄ではなく、事情が異なるところがあるので、二つに分けてお話してよいでしょうか。

(山本知事)

大学教育は教育委員会と異なるのですが、連動していると思っています。義務教育を経て、高校での教育から、大勢の方が大学教育に行くわけなので、そこまでの色々な流れを作るという関係がありますよね。例えば、アメリカでは、随分入試制度が変わりました。一回の試験で決めるということはやっていなくて、私も80年代ずっと大学に留学していましたが、高校生からいろんなボランティア活動などを通じて社会活動をやり、いろんな勉強をするのですが、ただ

成績がいいだけでは大学に行けません。スポーツも含めた、いろんな実績を積み重ねていくことを、大学が評価します。試験をするわけですので、そういうところにつながっているという観点でお話いただければと思います。確かに、大学とイノベーションみたいな話からは、ずれてしまいますけれども、構いません。そのあたりは、いかがでしょうか。

(平田教育長職務代理者)

共愛学園前橋国際大学は、地域の人材を、地域の方々と共に育てることに専念するという覚悟を決め、現在に至っています。自分たちのミッションは、地域から人材を預かり、地域の人材として育成し、地域にお返しすることであり、そのためにはどうするかということを皆で考えました。大学だけで人を育てようと思わないで、地域の小中高を含む地域の力を借りて、一緒に育てようという覚悟しました。

先ほど知事から、教育における自立というお話を伺いました。学校種を問わずそのとおりだと思います。子どもたちが大人となり、自立するためには挑戦することが大事ですが、挑戦を促すためには、自己肯定感を向上させておくことが大事だと思います。例えば、大学生を見ると、20歳前後の同世代の学生の集団の中にいるだけでは、彼らは育たないです。現在の若者、若者のみならず日本人全体かもしれませんが、場の空気を読みつくし、一步前に出ようと思っても、周りを見て止めてしまいがちです。しかし、彼らが同世代の集団から離れて、地域に出て行って活動をする中で、地域の方々から「ありがとう」って言われたとか、厳しく叱られたが、でも最後まで見ていてくれたという経験を通して、自分が地域に役に立つ人間だという自己有用感を得、一步踏み出し、挑戦することができると思います。

群馬県は、昔に比べたら弱くなったかもしれないが、大都市に比べると、地域の力が強いと思います。地域と一緒に子どもたちを育てるということがしやすい。これは子どもたち若者達の自立のために、非常に有効なことであり、教育委員会がさらに進めようとしていることでもあります。

もう一つ、大学での経験をお話すると、多文化の中での人材育成ということがあります。多文化との共生にはさまざまな種類がありますが、例えば外国人との共生を考えると、多くの外国籍の学生や留学生がいることによって、日本人学生ものびのびと自己表現できるようになります。日本は同調圧力が強いので、みんなと一緒になければいけないと自分を閉じ込めがちですが、外国人の学生がいることによって、日本人学生も解放されます。みんな違って、みんないいということ。知事が多文化共生を重点施策にしてくださったのは、教育

の面からもすごくありがたいことだと思います。外国人の子どもたちにとって大事ということだけではなく、日本人の子どもたちにとっても大事です。イノベーションを起こすときには打たれても「出る杭」になることが求められますが、そのためにまずみんな違ってみんないいとする風土が大切だと思います。群馬の環境は、たくさんの外国人の子どもたちがいて、日本人の子どもたちも、みんな違っていいと実感しやすい。群馬は子育てに合った、子どもたちが自立するのに合った環境だと思います。このあたりの話について、青木委員が詳しいです。

(山本知事)

群馬県は多文化共生共創社会っていうのを、宣言をしています。他の県と、どこが違うのかというと、これは県として、コンセプトを作って諮問委員会を作りました。かなり踏み込んでいったのですが、市町村と協力しようということで、市長会と町村会に投げて、市長会長と町村会長と署名を交わして、群馬県全体で地域共生共創社会を作っていこうとしました。まず、オール漕ぎを、自治体全体でやっていくということになってます。それから、県議会で多文化共生の条例を作ろうとしています。10年前ぐらいに、宮城とかいくつかの県で作っていますが、まだこんな状況になっていません。あと、はっきり言うと、そのまま日本で第1号の条例になっていくということで、これから県議会も巻き込んで多文化共生共創社会を作っていくということですが、これをやるためには平田先生からもあったように、まずは認識を変えないといけない、意識を変えなきゃいけないと思っています。ここでも、明らかに子どもたちの教育が大切だと思っています。総合計画の有識者ヒアリングを行ったマシ・オカさんというアメリカで活躍している俳優兼プロデューサーですが、彼は日本人ですが、小さい頃からアメリカに行って、いろんな教育を受けています。彼も、小さい頃からいろんな文化に慣れ親しんでいくのがいいのではないかと言っていました。そこは青木委員の方から見て、どういう形で、子どもたちに外国人との共生、共創の文化を作っていけばいいと思われませんか。

(青木委員)

私は、他県から引っ越してきました。初め来たときには、本当に周りが外国人だらけで、異国に来たような感じがして、ここで子育てをすることがすごく不安でした。それが、幼稚園に行き、学校に行くにつれて、外国籍の子どもたちの良さが、すごく見えてきました。例えば、学校行事や、PTAの活動などでは、率先して親も子も協力的に動いてくれます。日本人以上に動いてくれるので驚きます。授業参観では、例えば、音楽だったり、美術だったり、体育だ

ったりが、他国籍の子と一緒にですが、日本人にはない感性とか、発想みたいなものがすごくあって、日本の子どもたちと切磋琢磨し合っている様子が見て取れます。それが親にとっては、すごくうれしい。言葉は通じないのですが、お互い身振り手振りで、相手に何かを一生懸命に伝えようとしているところを遠くから見ると、すごく心が和んだ気持ちになります。今では、外国人といることが当たり前の環境ですので、大泉町は多文化共生という言葉に適している街だと思っています。初めは、あまりよい印象の場所ではなかったのですが、今では住めば都という言葉のとおり、グローバルな社会、グローバルな人間を育てていくには、面白い街だと感じています。自分の子にとっては、豊かで恵まれた環境だと思っています。

(山本知事)

すごく前向きな見方で、とても心強い気がしました。そうすると、子どもの頃から、外国人というか、他の子どもと、とにかく触れ合う機会を作ることが大事なのかもしれない。自然に受け入れるみたいなことなのだと思います。

(青木委員)

お店も外国のお店が多いのですが、普通に日本人の方も入っていくし、普通にショッピングができるような街です。私にはそれが自慢です。

(山本知事)

コミュニケーションはどうなのでしょう。外国から来られた方々は、日本語ができる人も、できない人もいるのですが、そのあたりは、どうですか。

(青木委員)

世界共通語の英語ということでもなく、大人も子どももジェスチャーです。例えば、三カ国語を介さないと通じない子も中にはいます。そうなった時は、子どもたちが「この言葉ならできるよ」と言って、次の言葉に変えて、次の言葉、次の言葉というようにして伝えていきます。それで子どもたちの輪ができていくような感じです。

(山本知事)

多文化共生、いったん、懇談会が終わって、これから条例の議論をしますが、またお知恵を貸してください。

次に武居委員にお聞きしたいと思います。子どもたちのケア、特にいじめの問題等々もずっとやってこられたということで、まず、子どもたちを守るとい

うことで言うと、これから県としてはまず児童虐待の防止条例を作ろうと考えています。色々と県庁内に指示を出して、他の県の条例よりも、一步踏み込んだものにしようと考えています。今、新型コロナウイルスなどもそうですが、ネット上のいじめとか嫌がらせみたいなものもあって、ここに何ができるかというのがありますが、条例では、書き込んでいる県もあるから、こういうところまでは思っています。そこでいじめの問題ですが、ものすごく私たちにとっても、大変深刻な問題なので、聞かせていただきたい。日本の子どもはアンケートを取ると、あんまり明るい未来を意識していなくて、例えば、未来への希望はあるかみたいな質問を聞くと、諸外国に比べると自己肯定感の評価が低いです。一つは心のケアをする、いじめから守るっていう側面と、もう少し群馬県の子どもたちが、個性を押し付けられないで、結構伸び伸びして、どんどん外に出ていきたいと、さっき言った同質化の圧力が強いと言っていましたけど、これが最も大事だと思っています。例えば、外に出たい若者たちが減っているということや、進取の気性がなくなっているということが、今の子どもたちがあんまり未来に希望がないみたいなこととして、アンケート結果に出てきていますが、先生はどのようにお考えになっていますか。

(武居委員)

今の社会は、私たちが昔生きてた頃と、もう随分変わってきています。社会構造の中で、色々な子どもたちが心を病む出来事が、先ほど知事がおっしゃった虐待の話もそうですし、起こっているんだと思っています。そういう中で、子どもたちが学校に通うことが、本当に生き生きと楽しい出来事であるか、そういう観点で見たときに、ほとんどの群馬県の子どもたちは元気に生き生きと学校教育の中で、自分自身を伸ばしているというのが、実際のところだと思います。ただ、一部に、どうしてもそこに乗りきれない子どもがいるということも、事実であります。その結果が、不登校というような形で、今出てきているのではないかと考えています。でも昔から、不登校というのは問題になってきましたから、学校教育の中では、色々と対策を立てて、子どもたちが生きやすい学校の間を作ろうというようなこともしてきたわけです。それなりに成果は出てきて、不登校傾向の子どもが復帰するなんていうことも、よく見られていました。でも、生きにくさを抱えたまま、家庭に戻ってしまうというような、家庭から出られない子どももいます。それは知事がおっしゃる20年後の群馬県を考えたときに、そこから出してあげられないということは、とても残念なことだと思います。もったいない人材だと思います。そういう子どもを見たときに、非常に多様性を持っている子どもが多い気がしていました。現場にいたときに、特性が強い子ども、それから個性がある子ども、能力を持ってる子ども、

そういう子どもが、どうしても学校という組織の中に、入り切れないような部分があるのだなと思いました。それをどうにか学校に戻して、子どもたちの人格形成する年代を、学校現場でどうにか育てあげようと今まで努力してきました。

しかし、一旦、職を引いて、こう広く見てみると、その生きにくさを感じている子どもがストレスを感じないで、学べる場所があれば、その子達を育てることができるのではないか。引きこもらないで、8050問題なんていうところまでいかないで、ちゃんとそこで学べるような場所を作っていくことができれば、伸びる保障ができるのではないか。そうすると、群馬の20年後も非常に、そこから出た子どもが、この群馬県を支えてくれるのではないだろうか。そんなことを今考え始めているところです。

(山本知事)

今武居委員がおっしゃった、現場で見ると、群馬県の子どもは比較的伸び伸びしている人が多いと。そういう分析をされているのは、すごい救いというか、うれしいなと思っています。どちらかというところ、もしかしたら東京とか大都会の子どもよりは、実は意外と伸び伸びやってる子どもが多いという印象を持っているわけですね。

もう一つの、ひきこもりというか、不登校、学校に行きたくない、個性があっても能力があっても、学校に行きたくないと言う子どもたちがいるという話ですが、そういう子どもたちを活かす空間があれば、20年後の群馬県が上がるって話がありました。ICTとかAIが発達して世の中が大きく変わっていくということ言うと、最近ネットを通じた教育というのは、すごく注目をされています。私も沖縄で見ましたが、N高というのがあります。ここはなかなか普通の学校に行きたくない子どもたちが来ていますが、かなり伸び伸びやあって、ネット上だからバーチャルですが、リアルも一緒にあります。もちろん校舎もあって、年に何回か、職人に付いて見てみたり、漁師に付いて学んでみたりみたいな形ですね。ここがものすごく今注目されていて、群馬県としても、これからインターネット教育というか、こういうインターネットを使ったN高のようなところとも連携しようと思っています。こういうところに、才能があっても、しかしながら普通高校に、学校に馴染めない子どもたちを伸ばす手段があるのかなと改めて思いました。そこは、例えば、授業を何度でも見られるし、手挙げにくい友達もどんどんネット上だと発言したり、そのままオンタイムでやりとりができるので、先生とやりとりしたりしています。何でもかんでも学校のよさを、進学率で決めてはいけないと思いますが、でも始まってそんなに経っていないのに、結構いい大学にみんな行ったりして、実績もあげています。いろんな意味で、群馬県として、この仕組みから学べるところが

あると思っていて、これはちゃんと進めていきたいと考えています。今おっしゃったように、個性があって、実ほうまくはまれば才能を伸ばせる人たちが、生き生きできる空間が大切だと思います。今のN高みたいな取組を群馬県でもやっていきたいと思っておりますので、またご相談させていただき、ご支援いただければと思います。

(山本知事)

次に竹内委員に伺いたい。今、教育に携わっている方々のご意見を聞きました。竹内委員は、教育者ではなくて、民間の経営者ですが、竹内委員のマクロに行くと、若手社員が多くて、ものすごくみんな若手社員の人たちが礼儀正しくて、いい感じであります。もちろん、色々時代も変わってきて、今までの教育でおかしかったところも色々言われているし、体罰は絶対にいけないことですが、いわゆる教育イノベーションという、新しいところばかりに目が向きますが、例えば、私の友人で日系人のマシ・オカ氏も親友ですが、彼はとっても、日本的です。どちらかという、アメリカに育った日本人の方が、昔の日本人みたいだと思います。それがどういうことかと言うと、もちろん非常に頭は先進的で、マシ・オカ氏もそうですが、最先端の教育も受けていますが、礼儀とか、人に対する気配りとか、心配りとか、これはもしかすると、DNAと言ってよいかわからないけど、何となく昔の日本人が大事にしてきたものを持っています。虐待とかは絶対にいけないのですが、きっと、教育においては、変えなきゃいけないものと、やっぱり残していかなきゃいけないものというのはあると思っています。押しつけて、無理やり規則に従わせるとかではなくて、子どもの頃から、今まで私たちが持つてる礼儀作法とか、人に対する思いやりみたいなもの。私の母親もいつも公衆道徳って言っていて、これは公衆道徳に反すると言って、まず人に迷惑になるようなことはやってはいけないということをいつも教えてくれました。そういう点から見ると、子どもたちの教育という観点で言うと、竹内委員はどのように感じていますか。

(竹内委員)

今おっしゃったアメリカの人たちは、自立心があると思います。個人主義という言い方もありますが、自分を大切にします。ですから、同じように人を大切にします。これは自尊心の問題だと思っています。プライドともちょっと違うと思います。自尊心は教育の中で一番大事なもので、実はいじめなんかも、自尊心がないからやります。そういう分析は、難しいかもしれません。自尊心は、自分をおとしめないことなのです。そんなことしたら自分が恥ずかしいという、その気持ちがないからいじめることができるのです。ですから、外国の子ども

たちに対しても、あいつは肌の色が違うからって遠ざけたら、それは自分をおとしめているのです。自分は低い人間だということを、言わないうちにも示してしまっています。ここを注意しないとイケません。自尊心がプライドにつながって、自分たちの郷土を愛することにつながっていくと思います。例えば、東京の人は、地方の人を馬鹿にしますよね。なぜかと言うと、別に、東京人が偉いわけではないのですが、自分たちは上位に住んでいると思っているからです。田舎はこんなものもないだろう、モノレールも、地下鉄もないだろうと。こういうことを言う東京の人は、自分というものをおとしめているのです。皆同じ日本人じゃないですか。この辺のところを考え方として、ちょっと違うと感じるのです。

私はしつけが大事だと思っています。お客さんが来る場合、私の会社は原則として全員起立をして、お客さんが次に一步動くまでは、直立不動です。しかし、それをやめてくれと社員が言うのです。ソフトウェアの会社ですから、社員はプログラムを頭で考えています。プログラムを考えている時に、お客さんが来たので、鉛筆をおいて立ち上がった、そして座ったら、プログラムを忘れてしまったと。生産効率が下がるというのです。確かに、そういう言い訳もあるでしょう。それなら、東京の大メーカーの部長が、新幹線を使って、わざわざ会社を訪ねてくれたとしても、今度からあなたは起立もお辞儀もしなくてもいいと言いました。その代わりあなたに起立して着席するまでにかかっていた7秒をあげるから、その7秒で部長に会って来いって言っても、それはできないですよ。来てくれていることに対して、わずか7秒の感謝ができないかと。そんな7秒くらいで忘れてしまうくらいの頭だったら、私の会社では必要ないよ、と言います。私の会社の中には見せるものがないのです。コンピューターは頭の中のことですから、何を考えているかわかんないのです。そうすると、こんな若造の社員にうちの機密を明かして信用できるのかと心配です。簡単に言えば、2つのデパートのどっちが儲かっているか、データを持っていれば、計算で分かってしまう訳です。絶対しゃべってはいけないのです。そうになると、この人間は信用できるかできないかって、すごく大切なのです。けれど、信用できますって自分で言っても駄目なのです。相手が信用してくれないと意味がない。ですから、頭の中を割って見せられないので、人は物腰で見るのです。服装とか目つきとか、態度で、この若造は信用できるか、いや、こいつはいい加減だなと。人を見かけで見てはいけないこともあります。見かけも実は大事なのです。そういう意味で、きっちり起立して、ピシッとお辞儀して、失礼します、と言って座る。こういうことを義務づけています。

外見と言っては失礼ですけども、僕はそれがすごく大事だと思っています。学校の先生も同じです。体育ではない先生が体操着で教えていることもあります

が、絶対駄目です。先生方の服装が乱れている学校は、絶対にいじめがあります。だって先生がいい加減なのですから。保護者が申し立てをしてきて、色々なことを言われたとしても、あなたに何を言われようとあなたの大事なお子さんを、私は責任持って預かっています、そう言える先生は少ないです。校長に聞いてみます、とかしか言えないのです。それは自分の義務の放棄なのです。そのように言われるということは、自分の態度、服装、これに問題があるのです。体操着を着ていれば、やっぱり親しみを覚えられてしまいますから、「そうですよね、先生」となるのです。先生が偉いという意味ではなくて、きちんと整えるべきだと思っています。知事は、災害関係の記者会見のときに、防災服を着ています。あれは、そういう服装だと思っています。知事が災害に取り組んでいるということ、服装で表しているのです。自衛隊も、消防隊員も、警察官も、その服装を着た時に、自分の任務と目的を自覚します。体操着で行ってたら、誰も感心しません。だから服装も大事、しつけも大事、言動も大事。そういう意味で、自分を大事にする自尊心っていうものを、養う教育が絶対求められていると思います。

自尊心があれば、群馬県を愛せます。でも「群馬県の自慢は何か」という時に、誰も言えないのです。だるまがあるとか、草津温泉があるとか、こんにやくもあるでしょう。総理大臣も出たでしょう。だけど、そう言われて、そうだ、うちの県も大したもんだよなんて、人に言われて気が付きます。でもテレビなどで、日本に来た外国人に聞くと、こんなすごい国だと思わなかったとか、親切だとか、それを私たちはテレビを見ながら、非常に嬉しい気持ちになります。日本人でよかったなと誇らしく思えるのです。宮大工が建築する姿を見て、こんな芸術的な建物はすごいと、誇らしく思います。嬉しい、誇らしいという気持ちが、自分たちの国を愛する気持ちに繋がります。それは自分たちの自尊心をくすぐることだと思っています。それが自立になると思います。

(山本知事)

とても大事な視点だと思いますが、今、竹内委員から、自尊心の話がありました。が、中学校でも教えていた益田委員に聞きたい。

子どもたちが、自尊心があれば、いじめはないという話。他人をいじめるとするのは、自分をおとしめることだと思うというか、そういう気持ちを育てるためにはどうしたらよいのでしょうか。例えば、今、竹内委員からしつけという言葉がありましたが、よく考えなければいけないところで、まず基本的に暴力みたいなものは、絶対いけない。その中で、今言ったような、自尊心を作っていく、他人に対する思いやりを作っていくには、どうしたらいいとお考えに

なりますか。

(益田委員)

自尊心は様々なところで育てられるのだらうと思います。特に、学校教育において、それは集団の中で学ぶということの中で、人を引っ張る経験をさせたり、小さな集団の中で、色々なことを教員が任せたり、体験を積みませ、一つ一つ小さな時からそういう体験を積みませっていくことが実は自尊心を育てる上では大切であって、それが学校というところの価値のひとつなのだと思います。

家庭の中でできることと、それから学校の中でやれること。これを結びつけることが大切です。教員は、学級経営しているわけですから、それは40人を束にして経営しているわけではなくて、例えば、給食が始まる時、誰に号令をかけさせるかと考えます。こうして、役割を与え、責任を持たせます。学校はそういった体験を通して自尊心を育てる場です。こういう中で、私は自尊心を育てていけると考えます。

(山本知事)

学校の先生のお話がありましたが、教育者の方々もいらっしゃいますが、教員の方々のあり方みたいなものについては、今、なかなか難しい状況にあると思います。本当に忙しい中で、しかも、例えば、生徒に接するのも相当いろんな気を使わなければいけないという状況が今、はっきり細かく言いませんがあるわけです。

なぜ私がいさつの中で、自由になるためだという、教育者の話を紹介したかということ、そういうふうに教えてくれる人が誰もいなかった。子どもの頃に何で勉強するんですかと聞くと、立派な大人になるためにだよ、というような感じだったのです。この先生が言うように、何で君たちも勉強するのかと、自由になるためだと言われたら、多分ちょっと考え方も違っていたと思います。どういう先生に会ったかによって、子どもは全然変わってくると思います。

そういう中で、教員の育成というか、教育者の育成みたいなものにずっと力を入れてきましたが、そのあたりはいかがでしょうか。

(益田委員)

まさに知事がおっしゃるとおりで、多様化する課題、一人一人が社会の中で異なるニーズや価値を持つ時代の中で、そういった社会で育つ子どもを指導していく、教育をしていく場が学校です。そういうことを背景にした教師力・指導力の大切さということは、知事のご指摘のとおりだと思います。例えば、大学の中では、早く学校というところの文化に馴染ませようということで、2ヶ

月間の教育実習を実施している学校もある。県内100校を超える義務教育の学校の中に学生たちを送り出し、学校の文化を肌で感じ、どんなことを学んでくるのか。さらに、そこには指導していただく先生方もいます。指導者の先生も、学生を指導することで、こういうことができないのだということにも気づいていただける。こうして、相互に指導力を引き上げるような結果につながる。私は、できるだけ早く、多くの経験を学校の中で積ませることが大切だと思っています。

(山本知事)

そのあたり、平田委員、いかがでしょうか。

(平田教育長職務代理者)

賛成です。学生が地域に出て何らかの役割を果たすことで、学生は自己肯定感を得、その指導を通して地域は教育力を付けて行くと思います。学生の側の学びを中心にお話すると、先ほどから自校肯定感や自立というキーワードが出ていますが、PISAという国際テストにも、OECD諸国に比べて学力は高いのに、自己肯定感が低いという日本の子どもたちの特徴が出ています。群馬県は全国平均よりは高いかもしれないが、でも低いです。自立には自己肯定感が不可欠であり、この状態での知事の言われる意味での自立は難しいと思います。

勤務校にも教員を目指す学生たちがいて、教育実習よりも下の学年で学校現場に行き、学校現場の先生方からご指導いただく機会をいただいています。先生方は丁寧にご指導くださり、不足しているところを指摘してくださり、改善が見られれば褒めてくださり、フォローをさせていただきます。例えば、運動会の手伝いをさせていただく。子どもたちにとっては学生であっても先生です。学生たちは子どもたちから「先生」と言われ、先生方からは「おかげで助かった。ありがとう」と言われる。そうした経験を通して、学生たちは自己の改善点を見つけると同時に、自己有用感を高め、社会に羽ばたく準備をします。こうした経験はなるべく早いうちにできるといいと思います。

大学生に限らず、高校生ができるといいと思います。一部の県立高校ではキャリア教育の一貫として実施していますが、卒業間近の高校生が小学校に行き、小学生に自分の経験を語り、子どもたちと一緒に様々な経験を積むという取り組みがあります。自分より年少の子どもたちや、先生や親ではない地域の大人のもとで、様々な経験を積むことによって、自分が役に立ったという経験をし、社会の中に自分の場所があることを実感できる。ぜひ、大学だけではなくて、下の学年でもできたらよいと思います。

(武居委員)

続いてですが、下の学年での、小さい頃からの体験というのが、本当に大事だと思います。人との関わりの中で積む体験こそが、子どもたちの人格形成にすごく重要なことだと思っています。

そのところで、自己肯定感が薄らいってしまった子どもたちが、自分らしさを取り戻していく過程で、自己肯定感もちゃんと戻していくのではないかと思います。だから体験活動ができるような小さな集団から、例えば、不登校の子どもも取り組ませていければ、回復できるかなということを考えています。

(益田委員)

教員を育てるといような趣旨の方向の話題になってきているので、知事にご提案いただいている資料1の7ページにありますように、群馬県の20年後の姿を意識していくというのは、大変重要なことだと考えます。政策のエンジンというのが人だと考えると、学校教育の中では、学校の教員の資質がすごく関係があると思います。その中で、群馬県は、あと10年間で大量退職の時代となり、極めて重要な時期を迎えていくだろうという状況にあります。10年から20年までの間に、子どもたちの数が減り、クラス数も減っていくわけですから、なかなか新しく採用を増やせというわけにいかない。しかし、学校の教育課程はますます、多様化・複雑化してきている。このため、多様化・複雑化する様々な課題に応えるための、人的な支援を質・量ともに増やしていくことが必要になるのではないかと思います。教員養成の話から少し飛躍してしまうような話になってしまって申し訳ないですが、そういうことも子どもたちを育てていくという過程の中で非常に意識していかないといけない政策問題ではないかと思っています。

(山本知事)

大変参考になるご意見で、20年後をにらんだとき、まさしく今の話は、色々と問題になってくるところです。そこで、二つのことについて、コメントいただければと思いますが、一つは子どもの学力の話です。子どもの学力というのは、相当昔の調査だと世界的にも相当高かった時代があって、特に数学です。これは、私たちの時代の小学校中学校の数学の質が高かったので、私たちがアメリカに留学する時にGMATとか受けても、数学だけはトップクラスでした。そういう教育のレベルの高い時代から、残念ながら、教育や子どもたちのレベルが下がっているというか、相対的に順位が落ちている。例えば、アジアの国から来たビジネスマンの息子さんが心配してたのは、日本の中学校行くと勉強が遅れると言うのです。日本にいる間にレベルが遅れてしまうことを心配される

時代になってしまいましたが、特に子どもの学力というと、ものを考える力がないと言われてます。例えば、数字のように、答えが一つしかない数字のことではなくて、もっと物事を分析して、自分の発想で、しっかりと語る力がない。そのあたり、子どもの力を伸ばしていくために何をしなければいけないのかということと、もう一つは、子どもの頃からさっきおっしゃった体験、人と触れ合うということです。私が子どもの時は、とにかく子どもは自然や外に飛び出して、カブトムシ採りに行ったりして、の中で色々覚えたということもあります。できるだけ、子どもたちが外で遊べる環境が必要だと思います。なぜこういうこと言うかと言うと、色々慎重意見もありましたが、校庭の芝生化をやりたいと思っています。学校を芝生化するだけで、実はいじめが減るという調査があって、子どもが昼休み、外で遊ぶだけでも実はいじめは減るというのがあります。子どもたちが外でどんどん飛び出していく環境を作るというのも、色々これからのことを考える上で大事だと思っています。まず、1点目、この子どもたちの学力についてはいかがでしょうか。

(平田教育長職務代理者)

まず、なぜ算数を勉強するか、なぜ数学を勉強するかということについて、昔の日本は右肩上がりの社会であり、勉強することがよい未来に結びつくことを子どもたちは実感していた。しかし、そういう時代ではなくなった時に、先ほど知事がおっしゃったように、なぜ数学を勉強するのか、数学を勉強するとどういうところが、実社会で役に立つかというところを、今以上に、繰り返し子どもたちに教える必要があると思います。

もう一つは読解力の問題があるのではないかと思います。問われていることを正確に理解できていないのではと。PISA等の試験でも、数学や理科はまだ上位にいますが、読解力は下がってしまっている。原因として、スマホが普及し、本を読む習慣がなくなってきたこと、それに伴って短文の文章は読めるが、長い文書を読む習慣がなくなっていること、さらには情報を文章ではなくすべてYouTube等の動画から得ることが多いからではないかと思いません。読解力の不足が原因の一つではないかと思いません。

(山本知事)

今の意見をお聞きして、思い浮かぶのは、県民の幸福度を上げるということを考えて、知事になりました。その幸福度の中で大事なことは、平均寿命よりも健康寿命です。健康寿命が全国で一番長い県は山梨県です。なぜ山梨県が長いかというと、二つ原因があると言われてます。一つは高齢者の就労率が高いということです。もう一つは図書館の数が10万人あたりだったか、全国で一

番多いということです。最近、図書館と健康寿命の関係というのが議論されています。上の方から本を読めと押し付けることはできないかもしれないけど、図書館があれば、そこに行って、色々な本を読むという習慣を後押しできると思いました。

外で遊ぶ。これもすごく大事になりますけど、竹内委員いかがでしょうか。

(竹内委員)

芝生の上というのは、私はいいなと思います。問題は、友達が上か下かというような比べ方をすると、どうしても自分は下になりたくないの、いじめに走ります。でも、芝生というのは、平らです。上下関係がありません。このあたりは、物理的なもの、心理的なものとしても面白いと思います。

もう一つは、子どもに「自分をおとしめない」って言い方は難しいのでしょうか。恥ずかしいことしたら、卑怯なことしたら、恥ずかしいことだという教育は、自分をおとしめないということが伝わっていくと思います。そういうことが必要だと思います。

もう一つは、自分が誇れるかどうか。誇りというのは、持てと言っても持てるものではない。これはやっぱり他人の作用があると思います。先ほど外国人の話をしましたけど、日本人はすごいよねと言われると、うれしくなります。このことで随分いじめは防げると思います。君はすごいね。あんな困っている子を助けたのかということで、ガキ大将はいい子の味方になってしまうのです。だから、ジャイアンが良くなるのは、簡単なのです。叱って育つということがあります。多く褒めすぎると、失敗を隠す子どもになります。褒められ続けたいから、失敗を隠そうとなります。これは少し気を付けなくてはいけないと思います。

(山本知事)

ありがとうございます。

益田先生いかがでしょうか。

(益田委員)

全国学力学習状況調査は、調査自体は県ごとの比較が目的ではありませんが、これまで群馬県は必ず上位にいる状況にありました。

知事をご指摘のPISAについては、過去の結果が芳しくありませんでしたが、近年のPISAの調査結果は中学校で特に高いようです。例えば、理科の先生方に、なぜ高いのですかと伺うと、私は学習指導がよいからと答えて欲しいのですが、自然が豊富だからというふうに答える方もいらっしゃいます。み

なさん、大変謙虚な方が多いように思います。実際は、学力も高いし、しっかりとした学習指導に取り組んでいることが、結果として現れているのだと私は捉えています。

(山本知事)

最後に青木委員さんにお聞きしたいのは、さっき言った自尊心の話ではありませんが、ここまでも話が出ているように、誰かから認められるということが大事で、褒め過ぎてはいけないんだと思うけど、他の人と違うからといっても否定しない。そこを褒めてあげるというか、肯定することは、子どもたちに対しては、とっても大事なんではないでしょうか。

(青木委員)

私が子どもたちを見ていると、「共感イコール好き」というような感覚になってしまっていると思います。共感できなければ、この人嫌いとなり、いじめに発展してしまいます。そのような感じを受けています。しかし、それは違うと思っています。そういうところから子どもたちを変えていかないとはいけないと思っています。

(山本知事)

どうやって変えていけばいいのでしょうか。

(青木委員)

意味を分からずに使っている言葉が多いと思います。ネット社会になって、携帯でパッと文字を打って、スマホから出てくる言葉が正しいと思って、ポンッと送信してしまったりする。意味合いを知らずにスマホをいじっているとすごく感じます。言葉の大切さとか、言葉の意味とかを、ネット社会であっても、そういうところを大事にしていけないと思います。

(山本知事)

とても今のも大事なポイントだと思います。

ということで、あっという間に、1時間半が経ってしまいました。

教育大綱はすごく大事だと思いますし、さっき言ったように、まさに群馬づくりの中核だと思っています。ぜひ皆さんにいろんなご意見をいただいて、教育大綱づくりに活かしていきたいと思いますので、引き続きご協力をお願いできればと思います。本当に色々勉強になりました。ありがとうございました。これからいろんな議論させていただきたいと思います。

4 閉会

(司会)

以上をもちまして、統合教育会議を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。